

光星ナイン行進 力強く開会式

第105回全国高校野球選手権は6日、兵庫県西宮市の阪神甲子園球場で開会式が行われ、本県代表の八学光星（2年連続12回目）など、代表49校による熱戦が幕を開けた。

この日は朝から青空が広がり、まぶしい日差しが照りつけた。開幕を告げるファンファーレの後、前年度優勝校の仙台育英（宮城）を先頭に代表校が北から南の順に行進。本県代表の八学光星は4番目に入場し、県大会の優勝旗を手にした中澤恒貴主将を先頭に、ベンチ入りした全選手が力強く行進した。

選手を代表して、高知中央の西岡悠慎主将が「ここにたどり着くまでたくさん壁や困難があった。追いかけて続ける勇氣さえあれば、夢は必ずかなうと信じ、全力で戦い抜く」と宣誓。歌手で

俳優の山崎育三郎さんが大会歌「栄冠は君に輝く」を独唱した。

開会式後に行われた開幕試合は土浦日大（茨城）―上田西（長野）が対戦。試合に先立ち、今春のワールド・ベースボール・クラシック（WBC）で日本代表「侍ジャパン」の監督を務めた栗山英樹さんが始球式を行った。

八学光星は大会第7日の12日、午前8時開始の第1試合でノースアジア大明桜（秋田）と対戦する。（棟方好華）

中澤恒「ワクワク」

○：開会式では4年ぶりに代表49校の選手全員が入場行進した。八学光星の中澤恒貴主将は「青森大会を通じて初めての行進で少し緊張した

が、甲子園でまた試合ができると思うとすくすくワクワクした」と気持ちを高ぶらせた。

行進では「笑わないように足並みをそろえて」とナインに声をかけて臨んだという。球場の広さに圧倒されながらも「うまくできたと思う」と振り返った。

大阪の暑さは「青森とそんなに変わらない」とい切った後の笑顔は愛くるしい。

光星 甲子園だより

光星 甲子園だより
内野手（3年） 琉偉 齋藤



「こしあんがたまらない」と好物のあんこの話になるとニコニコが止まらなくなる内野手。「特にようかんが好き」と言

親友とともに戦う

本県出身で、夏の県大会は計2試合に出場。準決勝で対戦した青森山田の川下大翔選手から「ドロドロにして帰ってこい！」と試合後、野球用手袋を託された。小学時代からの親友の思いを手に、聖地では「大翔とともに戦う」。

（弘前東中出、170センチ、71キロ。右投げ左打ち）

あまり気にならない様子。初戦に向け「だんだんチームの士気が上がってきている。東北大会で1回対戦している相手だが、打ち勝つ野球で隙なく戦いたい」と意気込んでいる。

栗山さんが始球式

○：3月のワールド・ベースボール・クラシック（WBC）で監督として日本を優勝に導いた栗山英樹さんが開幕試合で始球式を務めた。山田のボールがミットに収まり「WBCより100倍くらい緊張した。次の世代に（野球への）思いだけは届けようと思って投げた」と穏やかな笑みを浮かべた。

東京・創価高時代は甲子園が「宇宙より遠い場所」だったそう。「高校時代にみんながトーナメント制を経験している」とが（WBCで）世界一になれた大きな要因。この大会が長く長く、さらに発展していくと信じている」と語った。